

句集散策 (93)

広渡敬雄（沖・塔の会）

—— 山田真砂年・『夜は昔の』 ——

作者の十七年ぶりの第三句集。句集名は「新米や夜は昔の話し」に拠る。師鍵和田柚子が逝去し「未来図」が解散後、「稲」を創刊主宰して五年。師恩に謝し、句集の遅れを両親に詫び、稲俳句会の仲間と一層実感のある句を目指す。記す。

シリア・ヨルダン

同

中国ウイグル自治区

同

アルメニア

トルクメニスタン

キルギス

若い時から、シルクロードの中国と西域を結ぶ地域を巡って来た作者。大半が世界遺産であり、読者は風化した遺跡、砂漠の中の国境、遊牧民の暮らし、オアシス、彼らの住居（ウルタ）等、この地の悠久の歴史をじっくり辿る旅を堪能する。作者は宏大な自然の中に営む人にも羊にも同じ視線で詠いあげる。

竹植ゑて父母すこやかに老いるたり

父の日の父なにか言ふ聞き返す

柿若葉父の遺影に日の当たる

かく小さき母はまほろば天の川

星飛ぶや母は言葉をなくしつつ

食べこぼす母や菜の花蝶に化す

母逝くや庭に散り敷く花蜜柑

老齡の両親が、時代を追うにつれ衰弱しそして死を迎える。殊に母へは、暖かいた視線と共に俳人としての視線も感じる。

共に健やかだった過ぎ去った日々は宝物であり、「まほろば」や庭に散り敷く花蜜柑は母の人生への賛歌でもある。

肅々と影を曳きたる鳥総松
稲の香にいにしへの闇よみがへる

母校かな落葉の湿り匂ひたつ

梧桐の夜は水の香の起ちあがる

校の湿った落葉の香、梧桐と水の香には作者の感性も際立つ。

白鷺の脚に分れて花筏

蓮根掘膝をたよりに動きをり

ぬばたまの闇に首だす鶴匠かな

うかうかと踏めば水泛く春の土

玲瓏と影を脱ぎたる藤の房

読者にその場面を鮮明に浮かび上がらせる写生力は、花筏や蓮根掘の膝の動き、鵜舟からの鵜匠の首、じわりと浮かび来る春の水の等々、練達の妙。又一転して藤房の艶やかさも光る。

さるおがせみるみる山気降りきたる

冬樺山より星を掃き出しぬ

登山の体験か。サルオガセの山気、冬樺を箒との直感の冴え。

桜貝真一文字に沖光る

福寿草ふるさとの陽は海にでて

若布寄す犬が律儀に嗅いでゆく

現任の逗子での句であろう。全句、海の香りに余情が広がる。

絵踏みして火を噴くやうな酒の欲し

火恋し馬肉鹿肉買うてやろ

あとがきに記す虚構を描いても実感ある句の見本。

桜咲く食うてゆければそれだけで

文芸や遠きところに霜の花

自身の人生哲学と共に、文芸（俳句）への確たる志も示す。

昭和二十四（一九四九）年、東京都品川区生れ。「未来図」入会、未来図新人賞、未来図賞受賞。令和二年「稲」創刊主宰。句集「西へ出づれば」（俳人協会新人賞）「海鞘食うて」。日本文藝家協会会員、俳人協会評議員（角川文化振興財団刊）。